



Title	台湾における言語使用 : 政治意識という観点から
Author(s)	林, 欣儀
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2000, 34, p. 15-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56480
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

台湾における言語使用

— 政治意識という観点から —

林 欣 儀

1. はじめに

- 政治意識と人々の言語使用に関連があるかどうか。
- 所属政党が違えば、言語使用・言語切り替えのパターンも異なるのか。

上記二つのことを問題と感じ、この研究を始めた。

小倉（2000）は、今日の台湾における言語・文化とエスニック意識を考える格好の場となるのが、演説などの政治的パフォーマンスである、と述べている。その他、Feifel（1994）なども、台湾の人々の所属政党と言語使用の相関性について少し触れている。政治意識が言語使用に影響を及ぼす一つの変数として考える研究は管見の限りではあまりないようである。しかし、台湾の場合、人々の言語使用が彼らの政治意識と完全に関係がないとはいえないようである。本論では、テレビにおける言語使用及び政治家たちの言語行動という二つのことに重点を置いている。データとしてテレビの政治討論番組を用い、一定の場面で参加者数もほぼ決められている状況下で、人々がどのように言語を切り替えて使用するかを観察し、これを通して台湾の言語事情を記述・考察した上で、言語使用・言語切り替えと政治意識との関連性を一つの手がかりにして社会言語学的研究に新たな可能性を提示することを目的としている。

2. データと分析方法について

2.1. 言語切り替えの定義について

言語切り替えという現象について、学者によって、定義が様々であるが、本論では、言語切り替え、言語混合、借用などを区別せずに、全てを言語切り替え（以下では「CS」）という概念として取り扱う。

2.2. データについて

台湾での call-in¹⁾という形の政治討論番組を録画して分析することにした。

時期：1999年3月

構成：司会者の紹介とパネリストたちの挨拶、司会者1名とパネリスト3～5名のパネルディスカッション、視聴者による call-in の3つの部分からなる。

長さ：コマーシャルの時間を除き、1回の放送時間は50分ほどである。

15回を録画した。

3つの番組（5 + 5 + 5回）×50分=750分間

番組の構成は上述した3つの部分からなるが、司会者の発話と視聴者の call-in の切り替えには、政治意識に関わりのある言語特徴があまり明確に出ないため、今回はパネリストの発話の部分のみを分析対象にする。

分析の方法は、まずデータをパネリストの挨拶とパネルディスカッションの2つの部分に分ける。そして、パネルディスカッションの部分、パネリストの発話の回数と長さを問わず、一回の登場において発話の中で切り替えの起こったことがある人の数を数える。その次に、パネリストが行った切り替えのある発話を、終助詞などの文法的特徴とポーズなどの音声的な特徴によって、句読点などのマークがつけられるところを文と節

(clause) の切れ目とし、sentence, clause, intra-sentence の3つのレベルに分けて分析する。

3. 分析

台湾における人々の言語使用と政党との関わりを論じる前に、まず本論で扱った3つの政党の歴史を紹介する。

【表1 各政党のプロフィール】

政党名	政治立場	党員の構成	政党略史
国民党 (中国国民党)	緩和統一	250万の党員を擁している。 (外省人35%、本省人65%)	台湾第一大政党。中国との統一を主張している。
民進党 (民主進歩党)	緩和独立	党員4万人。(本省人が中心)	1986年に成立。台湾第一野党という地位を占めている ²⁾
新党	急進統一	外省人二世が中心。	1993年国民党から独立。国民党より中国との統一を積極的に主張している。

3.1. パネリストの言語使用・言語切り替え

15回の番組で登場したパネリストは70人いる。70人のうち、1回しか登場しなかった人もいれば、2・3回ほど登場した人もいる。このため、パネリストを数える時、人数を延べ人数と異なり人数に分けて示す。番組の流れは、最初に、司会者が当日の議論するテーマを簡単に説明し、その次にパネリストたちの名前および職業を紹介する。司会者の紹介と同時に、紹介されたパネリストは1人ずつ司会者やテレビの前にいる視聴者たちに挨拶する。そして、パネルディスカッションに入り、最後にパネリストが1人ずつ20～40秒ほどの時間で結語を示すというものである。

パネリストたちの挨拶は、自分や自分の支持する政党をピーアールする絶好のチャンスであるため、事前に準備し、相当意識して発話されると考

えられる。しかも、挨拶はほとんど一つのセンテンスで終わるほど短い発話である。これは、パネリストの意識を十分に反映しながら、彼らの言語能力をあまり要求しないものであり、パネルディスカッションの部分における発話のように、長くてしかも内容のきちんとまとまったものを話すのとは質の違う発話だと考えられる。したがって、本論ではパネリストの挨拶における発話とパネルディスカッションにおける発話を二つの部分に分けて分析する。

15回の番組で登場するパネリスト70人の挨拶およびパネルディスカッション2つの部分における言語使用・言語切り替えを整理してみると、挨拶の部分で国語と閩南語³⁾を切り替えて発話する人が8人、閩南語で発話する人が5人おり、またパネルディスカッションで国語と閩南語の切り替えをした人は33人いる、という結果を得た。では、国語以外のコードを使った人たちはどのような人なのだろうか。また、なぜこうしたコードを選んだのだろうか。こうした疑問を明らかにするため、これらの人を取り上げて、彼らの基本的な個人情報と彼らの言語使用・言語切り替えを再び整理した。

パネリストの個人情報については名前以外に、性別と職業しか知らされていない。分析の便宜上、パネリスト全員を「ア」「イ」などのカタカナの略語で示す。また、職業については、現役の立法委員（国会議員に当る）・市議員もしくはかつてそれらを務めたことのある政府役員が最も多い。その他に、ジャーナリスト、フリーライター、大学の教授などもある。今回用いたデータは政治討論番組であるので、登場するパネリストはほとんどが自分はある政党の黨員、もしくはある政党を支持しているなど、政治的立場を明確にしている。また、本論の主な目的の一つである人々の政治意識と言語使用・言語切り替えとの相互関係の追究という理由から、パネリストの個人情報として、パネリストを示す記号、性別および支持する政

党の3つを取り上げている。では、次にパネリストの挨拶の部分の言語使用を見てみよう。

3.1.1. 挨拶の部分における言語使用・言語切り替え

挨拶の部分で、国語と閩南語の切り替えを行った人は8人、閩南語のみを使った人は5人いた。挨拶の表現の仕方に多少違いがあるが、大部分のパネリストは「司会者、視聴者の皆さん、こんばんは」または「司会者の名前、視聴者の皆さん、こんばんは」という言い方をしている。しかし、国語で挨拶する人は上述の二つの言い方のいずれかを全部国語で発話するのに対し、閩南語で挨拶する人は全員「司会者、視聴者の皆さん、こんばんは」のみを使い、「司会者の名前、視聴者の皆さん、こんばんは」という言い方で挨拶する人はいない。一方、国語と閩南語を切り替えて挨拶する人は、大部分の人が「司会者の名前、視聴者の皆さん、こんばんは」という言い方を取り、司会者の名前の部分は国語で呼び、後部の「視聴者の皆さん、こんばんは」は閩南語で発話する。なぜ、司会者の名前を国語で呼ぶのか。その理由については、戒嚴令解除（1987年）前までの「国語優先」という言語政策の影響で、人々は漢字の閩南語の読み方がわからなくなり、学校や市役所などの政府機関ではほとんど国語で人の名前を呼んでいたことが考えられる（Kubler 1988）。したがって、ここでパネリストが司会者の名前を国語で呼ぶのは単なる台湾社会の習慣的なものであり、自分の意識や動機はあまり入っていないと考えられる。それゆえ、国語と閩南語の切り替えをしたパネリストたちも閩南語のみを使ったパネリストと同様に見なしてよいと思われる。要するに、パネリスト70人のうち13人が国語以外のコードで挨拶することを選んだと言ってもよい。ここで、とくに顕著だと思われるところは、パネリスト13人の支持する政党という部分である。13人のうち、国民党を支持する人2人、新党を支持する人は1

人もいないのに対し、民進党を支持する人は11人もおり、パネリストの挨拶における言語使用と彼らの支持する政党に関連があるように見える。では、彼らのパネルディスカッションにおける言語使用を調べてみよう。

3.1.2. パネルディスカッションにおける言語使用・言語切り替え

パネルディスカッションの部分ではほとんど司会者が質問をあるパネリストに提出してそのパネリストに答えてもらい、そして同じように司会者が質問を別のパネリスト（同じパネリストに再び質問する場合もある）に提出するという隣接ペア（質問-応答）の形で行われる。パネリストたちの言語使用実態を捉えるため、本論ではパネルディスカッションの部分で turn-analysis というアプローチで分析する。そして、1回の番組で「パネリスト一人の全発話回数」、「CSが生じたことのある発話回数」、「CSの回数」、「CSが生じたことのある発話回数が全発話回数に占める割合」、「CSが生じたことのある発話一回でのCSの回数」の五つの部分について整理した。そして、「CSが生じたことのある発話回数が全発話回数に占める割合」と「CSが生じたことのある発話一回でのCSの回数」の二つの部分にとりわけ注目する価値があると思われる。この二つの部分の平均値は、それぞれ27.27%と2.91回という結果となった。詳しく調べると、その平均値を上回る人がそれぞれ12人と11人いる。では、その平均値を上回る人はどのような人であるか、挨拶の部分で国語以外のコードを使った人と一致しているかどうかをみてみよう。二つの平均値とも上回る人が8人いる。このことから、発話全体でCSが生じる発話数が多い人ほど、一回の発話の中でCSする頻度も高いということがいえよう。更に、二つの興味深い点が観察された。まず、発話全体でCSが生じる発話数も多く、一回の発話の中でCSする頻度も高い人のうち、国民党支持者と新党支持者はそれぞれ1人とどまっているのに対し、民進党支持者には6人（異

なり3人) もいるということである。これを、三政党の支持者の登場する割合から見ると、国民党支持者は25人のうち1人(4%)、新党支持者は10人のうち1人(10%)であるのに対し、民進党支持者は25人のうち6人(24%)という割合である。要するに、民進党支持者が他の二党の支持者より頻繁に発話の中で国語と閩南語を切り替える可能性が高いということの意味する。3つの政党の支持者のCSの使用頻度の違いをよりわかりやすく理解するため、各政党の支持者が行ったCSの使用頻度を整理したが、その結果、民進党支持者が発話をする際、他の二党の支持者より頻繁に国語と閩南語を切り替えていることが分かる。

もう一つは、パネリストの挨拶とパネルディスカッションの二つの部分における言語使用の関係である。3.1.1.で述べたように、挨拶の部分で国民党支持者で国語以外のコードを選んだのは2人(異なり同)、民進党支持者では11人(異なり8人)、新党支持者では皆無である。そして、国民党支持者において挨拶で国語以外のコードを選んだ2人の人がパネルディスカッションの部分で切り替えを行った8人とは完全に違う人であるのに対し、民進党支持者においては挨拶で国語以外のコードを選んだ人とパネルディスカッションで頻繁に切り替えを使った人とがほぼ一致している。仮に、挨拶の部分は話者自身の言語意識または聞き手に自分をこう思ってもらいたいなどの自分の意識の表出であり、パネルディスカッションの部分は実際の言語運用と考えるならば、上述した挨拶とパネルディスカッションの部分の分析結果により、国民党と新党支持者の意識と言語運用実態には、ずれがあるのに対し、民進党支持者の意識と言語運用実態にはそうしたずれがなく、ほぼ一致していると言えるのではないだろうか。

では、パネリストの挨拶とパネルディスカッションの部分における言語使用と彼らの支持する政党との関係をより明確に理解するため、パネリストの支持する政党に基づき、彼らの挨拶とパネルディスカッションの部分

における言語使用と支持する政党との関係を再び整理し、その結果を【表 2】に示す。

【表 2 パネルディスカッションの部分と支持政党との関係】

	登場パネリスト人数		挨拶			パネルディスカッション で切り替えのある人数	
	延べ人数	異なり人数	M	CS	T	延べ人数	異なり人数
国民党 (人) (%)	25/70 35.7	17	23/25 92.0	2/25 8.0	0/25 0	8/25 32.0	6
民進党 (人) (%)	25/70 35.7	15	14/25 56.0	6/25 24.0	5/25 20.0	16/25 64.0	11
新 党 (人) (%)	10/70 14.3	7	10/10 100.0	0/10 0	0/10 0	7/10 70.0	5
その他 (人) (%)	10/70 14.3	9	10/10 100.0	0/10 0	0/10 0	2/10 20.0	1
合 計 (人) (%)	70/70 100.0	47	57/70 81.4	8/70 11.4	5/70 7.1	33/70 47.0	23

(注) 1. 略語の説明：M－国語、T－閩南語、CS－国語と閩南語の切り替え

2. その他：建国黨員や、所属政党を持たない中立的な態度の人

以上の分析から、民進党支持者が他の二党の支持者より、国語以外のコードを選び、発話の中で頻繁に国語と閩南語を切り替える傾向があることが明らかにになった。

3.2. 言語使用と政治意識との関係について

前項で分析した結果により、今回取り扱ったパネリストたちの言語使用・言語切り替えが彼らの支持政党などの政治意識と関係があることがわかった。さらに、民進党支持者は他の二党の支持者より、切り替えや閩南語を使用しやすい傾向が明らかになった。では、なぜ民進党支持者と他二党の支持者にこのような違いが生ずるのか。この理由として、民進党支持の人は本省人（とくに労働者階級の人）が多いということも考えられるが、

国民党支持者でも本省人が65%を占めていることを併せると、民進党支持者の切り替えや閩南語の多用は省籍、職業などの社会的な変数をあらわすというより、自分や所属政党などの政治意識に対するアイデンティティーをあらわす1つの手段としているのではないかということが挙げられる。

それに、一つ注意すべきことは、新党支持者の言語使用である。今回のデータで、新党支持者10人が登場した。挨拶の部分で1人も国語以外のコードを使っていないのに対し、パネルディスカッションの部分で切り替えを行ったことのある人は7人もいる。これは、非常に顕著な点だと言えよう。新党支持者のこうした言語行動をどう解釈すればよいのか。その理由は、新党の成立背景およびその党員の構成から論ずる必要があると思われる。

新党は国民党の政治理念（とくに主として台湾独立問題）に不満を持ち、1993年に国民党から独立した新しい政党である。党員の大部分は元国民党員であるうえ、ほとんどが外省人二世である。単純に省籍という社会的変数から考えれば、新党支持者の切り替えや閩南語使用の頻度は他の2党の支持者より少ないはずであるが、データでは、切り替えの回数とそのパターンを問わず、単に一回の登場で切り替えをしたことがある新党支持者の割合は国民党、さらには民進党支持者より高いという結果となっている。このことについて、二つの理由が考えられる。まず、新党は新しい政党であり他の二党より勢力が弱いため、国語以外のコードを使うことにより、自分の政党のイメージを強調・アピールするための一つの手段としていると思われる。さらにもう一つ重要な理由としては、近年「本土文学（台湾文学）」や国民党の本土化（台湾化）などの様々な領域における「本土化（台湾化）運動」の活発化にともない、外省人二世である新党支持者が自分の外省人色を抜き、自分を新台湾人の仲間に入れようというように考え、自分が新台湾人アイデンティティーを持っていることをアピールするために4)、更に「新台湾人アイデンティティー」を認める新台湾人たちの支持

(本土票)を得るために、意識的に自分の優位言語である国語の中で閩南語を挿入したり、閩南語に切り替えたりするのではないかということが挙げられる。その一方で、新党の政治理念(中国統一)から見てみてもわかるように、新党の人々は自分の外省人色を一生懸命抜こうとしていながらも、自分が中国人であり、中国に対する憧れがあり、中国へ戻りたいという気持ちもまだ強く残している。新党支持者たちのこうした台湾人および中国人に対するアイデンティティーの矛盾や心理的葛藤は、彼らの言語意識と言語使用の不一致をもたらす最も大きな原因であると考えられる。

3.3. 新台湾人アイデンティティーの現われとしての国語と閩南語の機能的切り替え

Gumperz (1982) と Nishimura (1995) の論じた切り替えの機能、そして同じく国語と閩南語の切り替えを機能的に論じている Su (1994) などの分類を参考にして、筆者は今回のデータで観察された国語と閩南語の機能的切り替えを6つのカテゴリー、そしてその下位分類として15の機能に分けているが、各機能の定義および実例の説明は今回は省略することにして、政治意識に関わるカテゴリーの一下位分類である新台湾人アイデンティティーの現われという機能は今まであまり論じられていないため、ここで特に取り出して説明したいと思う。

今回のデータで、ある発話者は新台湾人アイデンティティーを表明する手段として、国語と閩南語の切り替えを行っていることが観察された。以下、発話者【チ】の発話例を見てみよう。

例1 (チB3051) : (前略) 針對台灣 2 千 1 百万 lau poeh sin 共同利益所定出来一個政治主張而已。

(台湾二千百万の人民の共同利益のために作り出した1つの政治主張に過ぎない。)

類似例は先行研究にも見られる。

例2：李勝峰南部囡ah南部的孩子。(下線は原著者による。閩南語使用の部分)

(李勝峰は南部出身のもの、南部出身のもの。)

(Su 1994, ただし日本語訳は筆者による)

Su (1994) はこのような機能について、話し手が台湾で最も人口の多い閩南人たちの共鳴を求めようと考え、閩南語に切り替えることによって、一種の親愛的な雰囲気醸し出していると解釈している。しかしこうした閩南語への切り替えは話し相手に対して好意的な態度を示すことを主な機能としていながら、上述例は、かつての本省人に限定された台湾人アイデンティティーを越え、新台湾人としての共鳴を求めようとしているものと筆者は考える。

4. まとめ

本論で行ったいくつかの分析結果から、閩南語の使用は民進党支持者が最も高いということが明らかになった。この結果は、三つの政党それぞれの持つ立場と一致していると思われる。以下では、三つの政党の立場を述べる。

4.1. 3つの政党支持者の言語切り替えの特徴

まず、国民党支持者の切り替えの特徴について述べる。国民党は1950年前後に中国大陆から台湾に移住してきた政党である。前任総統の李登輝氏が登場する前までは、国民党の党主席から重要幹部に至るまで、ほとんど重要なポストは外省人が担当していた。このため、国民党は近年までよく「外来政権」といわれていた。李氏は就任してから、国民党の本土化を実践するため、いくつかの大規模な改革を行ったとはいうものの、国民党は

保守的で中華民国を代表する政党という基本的な立場は現在でも保ち続けられている。国民党のこうした立場とイメージは、本論のデータで得た結果、つまり国民党支持者の言語使用も彼らの支持する政党と同様で、やや保守的な立場なのである。これは、Sung (1993) が台湾における3つの新聞の見出しをデータとして分析し、国民党系である「中央日報」の閩南語使用の割合が最も低いという結果からも証明されている。

それに対し、最も頻繁にCSを行い、しかもCSのバラエティが最も多様であるのは民進党支持者のCSである。民進党は台湾の最初の野党であり、閩南語をひとつの政治的な象徴として使用した先駆けでもある。民進党が成立したのは戒厳令解除の一年前であり、台湾社会はまだ非常に閉鎖的であり、とりわけ、政治の面では民主的段階にはまだ遠い時期であった。こうした背景のもとで、民進党の黨員や支持者は国語擁護派の与党である国民党と対抗する意識が相当強く、また国語以外のコードを使用することによって、人々の注意を喚起する意図もあって、閩南語を頻繁に使用したと考えられる。しかし、国民党の党主席である李氏をはじめ他党の政治家も次々と公的な場で閩南語で発言するようになった結果、民進黨員が閩南語を自分ないし自分の所属政党のピーアールとして使用する意味合いもなくなりつつある。その一方、民進党支持者は小学校の「母語教育」など「台湾本土化」運動に身を投じて、本来台湾に存在する各エスニック・ランゲージを復興させようと呼びかけはじめ、現在も続けられている。こうした様々な事情により、民進党支持者たちからは過去の国民党との違いを強調しようとする意図がほとんど見えなくなり、閩南語使用が自分の支持政党に対するアイデンティティーを示すためのひとつの手段から、台湾に対するアイデンティティーを示すためのそれへと転化してきたことをうかがわせる。民進党支持者、とくに政治家たちが閩南語を頻繁に使用するという現象は、メディアの送り手である民進党政治家たちが意図して作り出

したものにとどまらず、メディアの受け手である一般の人々にも浸透している。これは、Sung (1993) が指摘したように、新聞では民進党立法委員の選挙宣伝活動などをめぐる民進党政治家らの関連記事が他の政党の政治家たちの記事よりも多く閩南語を国語に交えて表記することから、民進党支持者が閩南語を頻繁に使用するというイメージは、既に一般の人々に受け入れられ、社会に定着しつつあるともいえよう。

民進党支持者ほど頻繁には国語と閩南語を切り替えたり、閩南語を使用したりすることはないが、国民党支持者よりは頻繁に切り替えを行うのは新党支持者である。彼らの切り替えは今までよく論じられてきた社会的属性から考えれば、他の二党の支持者より少ないはずであるが、今回のデータのうちのパネルディスカッションの部分では、切り替えの回数とそのパターンを問わず、単に一回の登場で切り替えをした新党支持者の割合は国民党、さらには民進党支持者よりも高いという結果となり、一見すると一般的な予想と矛盾しているような言語的特徴がある。全体的に言えば、民進党と国民党に本省人支持者が数多くいるのとは異なり、新党支持者はほとんどが外省人二世である。こうした省籍という社会的変数に加え、今回のデータで登場した新党支持者はほとんど30・40代の中年層の人であり、学生時代に「方言禁止」という言語政策を最も徹底的に実行され、社会の Dominant Group である外省人が Subordinate Group である閩南人や客家人に順応しようとはしない社会的な風潮の強かった時期を経てきた世代であることから、新党支持者らは、特別の背景がなければ、閩南語をエスニック・ランゲージとしている本省人たちより閩南語が流暢ではないはずである。したがって、国民党・民進党支持者より切り替えの使用頻度もバラエティも少ないはずだと予想される。しかし、今回のデータでは、新党支持者は国民党支持者より頻繁に国語と閩南語を切り替えているという結果を得た。ただし、自分の意識の表出と見なされる挨拶の部分で国語以

外のコードを使用した人は10人中に1人もいなかった。新党支持者のこうした実際の言語使用と自分ないし言語に対する意識との不一致が生じた理由として、3.2.では二つのことを取り上げたが、今回のデータでは、新党支持者の言語使用および言語切り替えの特徴が他の二党と違いがあるとはいうものの、明確な特徴を持っているとはいいがたい。外省人二世の人々の言語使用・言語切り替えの実態、国語と閩南語の二言語の言語能力、更にこの二つの言語に対する意識を、世代別に明らかにすることが必要だと思われる。特に、30・40代の中年層と20代の若年層、20代以下の新しい世代の言語使用の実態および彼らの言語意識の変容を明らかにすることは、言語政策などを含む言語問題と社会言語学的な研究の関心事ばかりでなく、台湾の人々のアイデンティティーの実態、更に今後の台湾の政治的立場、中国との関係の行方の面においても決して無視できない課題だと思われる。本論では、新党支持者の言語使用に特徴があると指摘するにとどまるが、より厳密で全面的な研究を今後の課題としておきたい。

次に、3つの政党の支持者が行った切り替えの仕方と主な理由を【表3】にまとめる。

【表3 3つの政党の立場とそれぞれの政党支持者の言語使用の特徴】

支持する政党	政治的立場	切り替えの特徴
国民党	やや保守的であり、中華民国を代表するという立場。	あまり積極的に閩南語を使用したり、切り替えしたりしない。
民進党	国民党と対抗する。本来台湾に存在する各エスニック・グループの言語・文化を復興させようとする立場。	積極的に閩南語を使用したり、切り替えたりする。そのうち、閩南語を新台湾人アイデンティティーを示すための手段として用いる人も観察された。
新 党	台湾人か中国人か自分のアイデンティティーに対する矛盾。	言語意識と言語使用の不一致。

台湾語文促進会が、1993年9月から11月にかけて、政党と母語教育の相

関性について、当時の各県・市長の立候補者を対象に行った調査において、民進党に所属している立候補者らは母語教育に対して積極的な態度を取っている人が多かったのに対し（95%）、国民党立候補者中に積極的な人は5%にとどまり、そうでない人が七割以上を占めていた、という結果を得た。張（1996）は、上述した台湾語文促進会の調査結果について、政党が違えば、公用語の国語と閩南語などのエスニック・ランゲージの重要性に対する態度も異なると解釈している。これは本論で得た結果と一致しているものと思われる。

4.2. 今後の課題

台湾における人々の言語使用および言語切り替えが、支持政党ないし政治意識とどれほどの相関性を持っているかということ自体に更なる検証が必要であると考え。と同時に、人々の政治意識が彼らの言語使用に影響を及ぼすということは台湾に限られた特殊な言語現象であるのか、それとも他の地域社会にも見られるある程度の普遍性を持っている言語現象であるのかについても、今後の課題としていきたい。

注

- 1) 電話による視聴者参加型討論番組。
- 2) 本図は戴（1993）に基づき、筆者が作成したものである。作成時点では国民党は与党であり、民進党は第一野党という状況であったが、2000年3月民進党ははじめて与党の地位をしめるようになった。
- 3) 国語は、台湾における北京語のことを指す。一方、閩南語は台湾で最も人口的に多い閩南人たちのエスニック・ランゲージである。近年まで、国語は政府の保護下で、名前のとおり台湾の唯一の公用語という優位を占めていたが、最近本省人特に閩南人の経済力の優位や政治力の増大に伴い、国語の唯一の優位が失われつつある。林（1997a,b）は、閩南語が将来台湾の「超民族語」になる可能性があると予測している。

- 4) 喜安 (1997) は、このような現象を「外省人二世の台湾化」と称する。

引用文献

- 小倉虫太郎2000「台湾の言語・文化状況をめぐってーポストコロニアル的条
件と漢字の表意性」『月刊言語』2000年3月号 大修館書店
- 喜安幸夫1997『台湾の歴史』原書店
- 戴 国暉1993『台湾一人間・歴史・人性』岩波書店
- 張 裕宏1996「台湾現行語言政策動機的分析之評論」施正鋒編『語言政治與
政策』前衛出版社
- 林 正寛1997a「言語接触と多言語島『台湾』」『現代思想』1997年1月号
———1997b「多言語社会としての台湾」三浦信孝編『多言語主義とは何
か』藤原書店
- 吉田勝次編1990『嘖！嘖！台湾民主進歩党 爆発する台湾人パワー』社会評
論社
- Feifel, Karl-Eugen 1994 *Language Attitudes in Taiwan. —Asocial Evalua-
tion of Language in Social change—*. The Crane Publishing.
- Gumperz John.J. 1982 *Discourse Strategies*, Cambridge University Press.
- Kubler Cornelius 1988 *Code-switching between Taiwanese and Mandarin
in Taiwan*. The Structure of Taiwanese :A Modern Synthesis.The Crane
Publishing.
- Nishimura Miwa 1995 A functional analysis of Japanese/English code-
switching. *Journal of Pragmatics* 23.
- Su Zheng-zau 1994 *A Study of Code-switching in Mandarin Chinese in
Taiwan*. Master Thesis Graduate Institute of English National Taiwan
Normal University.
- Sung Mei-huei 1993 *A Sociolinguistic Study on the Mixing of Taiwanese in
Newspaper Headlines*. Master Thesis Graduate Institute of English
National Taiwan Normal University.

(大学院後期課程学生)